なことや思ったことを実現しようと努力した、悔いのない人生だったと思います。よく本を読んで、人に会って話をするのが好きで、インプットを怠りませんでした。その活力の根源は、やっぱり興味や好奇心だったと思います。そして、それをアウトプットする。最後まで、親父は車椅子で机に向かっていましたからね。

ご夫婦で子育てをされる中で、変わってきたことはありますか。

妻に「教育って何だろ?」と聞いたらね、「こどもを愛すること。愛するというのはこどもと時間を共有すること」と言われました。僕の育った石原家では、そういう意味では「教育」はなかったな。良い悪いではなく、父が中心の家庭でしたから。妻はこどものことをよく見ていて、僕は妻の言葉を間違いないと思っています。だから、妻に学校行事に行ってと言われれば行くし、こどもの面倒をみてと言われたらみる。結果、僕も家族と一緒にいる時間を楽しんでいます。こどもや妻を見ているとやっぱり面白い。もっと知りたいという好奇心があるから、会話もよくします。

こんなふうに柔軟でいられるのは、まず僕自身が「僕の思っていることは全部間違いだ」という視点を持って物事を見ているから。極端に聞こえるかもしれないけど、独特な父と母のもとで育った自覚があって、ましてや芸能界に身を置く自分の価値観は疑うようにしてきました。結婚して、妻と暮らす中で変わった部分も多いです。以前は、夜は真っ暗な部屋で寝るとか、食事は酒を飲みながらゆっくり取るとか、こだわりがありました。けれど家族で暮らしていく中でそうもいかない時があるわけです。ある時から「こだわらないようにしよう」と思うようになりました。その結果二十数年、こだわりからの「撤退」を続けていますが、これが僕にとっては結構、楽なんですよ。

たくさんの人との出会いを通して、色々なことを教わったから柔軟でいられるんだと思います。自分のこだわりから「撤退」し続けていたら、いつか崖から落ちるような、悪いことが起きてしまうんじゃないかって思っていたけど、全然悪いことにはならない。むしろ昔より今の僕は断然良い人ですし、楽しく過ごしています。

家族を持って、社会の変化も肌で感じます。妻は医者で、結婚後も仕事を続けていました。もちろん忙しかったのですが、妻の実家に助けてもらいながら子育てをしてきました。今、テレビの現場でもカメラマンなどの力仕事でも、女の人のほうが多いくらいです。根性もあるし、勉強熱心ですね。

次の世代にメッセージをお願いします。

無駄だと思うことこそ大事。広く興味を持ち、無駄を恐れずに挑戦したほうがいい。僕も今でも挑戦していますし、新しいことをこどもに教わることもします。最初から拒絶せず、何事も面白がるといいんですよ。テレビは楽しむためのツールだから、ある意味で無駄なものかもしれません。でも、60歳を過ぎて人生の第四クォーターにいる僕が今、何ができるのかと考えた時、「テレビマン」の僕が知っているテレビの楽しさや力を、若い人たちに伝えていきたい。それが自分の役割かなと思っています。

※このインタビューは、令和8年1月7日に行いました。